

◆ ニュースレター おおば ◆

平成28年7月号

テーマ『貧困世代・ミニマリスト』

○：「貧困世代」藤田孝典著、講談社現代新書を読んだ。「社会の監獄に閉じ込められた若者たち」というサブタイトルが付いている。著者は社会福祉士。以前、本レターで紹介した「下流老人・一億総老後崩壊の衝撃」の著者だ。若者たちの貧困と聞いても、ピンとこなかったが、真剣に向き合わなければならぬ問題であることに気が付かされる。

○：いつとき、ロスト・ジェネレーションという言葉を目にしたが、現在の若者たちは一時的な就職難や一過性の困難に置かれているのではなく、雇用環境の激変を要因とする、一生涯の貧困が宿命づけられている、と藤田氏は指摘する。貧困世代(ブア・ジェネレーション)、概ね15~39歳を想定したこの世代に何が起きているのか。

○：事例では、所持金13円で野宿していた21歳男性、生活保

護を受けている34歳女性、ブラック企業で鬱病を患った27歳男性、脱法ハウスで過ごす24歳男性、夜間定時制高校に通う17歳女性らが紹介されている。正直、そういうケースもあるだろうが、それは稀な事例だと私も思ってしまう。子どもを産みたくても産んで育てるゆとりのない若者たちの姿が大人たちには見えていない。「子育てはぜいたく」というのが貧困世代のホンネだというのが。。。

○：働きさえすればまともな生活ができる、仕事は選ばなければ何でもある、という労働万能説。たとえ働かなくとも、若者たちには父母や祖父母がいるので、多少お金を困ったとしても、家族が手を差し伸べてくれるのではないか、という家族扶養説。若者たちは元気で健康的なはずだ、という青年健康説。昔はもっと大変だった、という時代比較説。若いうちは努

力をするべきで、それは一時的な苦労だ、という努力至上主義説。これらの考え方は今や神話であり、社会環境、労働環境が激変する中で、認識を変える必要がある、と藤田氏は主張する。生まれつき資産の蓄えられた家庭に生まれるか否かによる「持っている人」と「持っていない人」の差、同じ職場でも「正社員」と「非正規社員」の差、これらが現にある中で、労働者が普通に働いて普通に暮らせる労働環境を整える必要がある、という氏の主張はうなづける。

○：政府・官僚機構は、就労支援を行い、雇用の現場に押し出すことで若者はよりよい生活が可能になる、という前提で政策を立てているが、それは「妄想的な時代錯誤の政策」だ。頑張る若者が減っている事実はなく、貧困が広がる原因は、その時代の若者を取り巻く環境にある。貧困世代にビジョンを示し、様々な支援策を講じ

て、多様な自立の方途を模索することが出来るようにサポートすることを政府がすべき、と藤田氏は主張する。

○：正直、私も「国が支援？」と思ったが、読み進んで、今の学生のアルバイト、ブラックバイトの実態、就活、大学の授業料、奨学金返還、住宅問題、等々、ただ「頑張れ」「努力せ」と言うだけでは解決出来ないと感じた。そして正面から向き合わなければ国の存続にも関わる、と思うようになった。少子化対策、人口減少社会対策が話題にはなるが、若者たちが結婚したい、子育てしたい、と思える社会にすることが先決だ。本書の提言では、給付型奨学金や富裕層への課税、家賃補助制度や住宅政策の充実など、実現可能な政策が示されている。それは国レベルだけでなく、自治体レベルでも取り組み可能なメニューもある。是非、先駆的な取り組みに挑戦し

てほしい。

○：もう一冊。「ぼくたちに、もうモノは必要ない。」佐々木典士著。ワニブックス。著者の肩書は、ミニマリスト。ミニマリスト？モノを自分に必要な最小限に減らす、生き方を言う、らしい。大量消費社会でモノをたくさん持つことが幸せにつながる、将来に備えて出来るだけ蓄える、ことが当たり前の中の世の中だが、著者はモノをたくさん捨てることで、その価値観がひっくり返った、という。持ちモノを自分に必要な最小限にするミニマリスト(最小限主義者)という生き方を通して、どう生きるか、「幸せ」を自分の頭で考え直して行った経過が素直に、正直に、記されている。

○：以前、主婦の書いた「整理整頓」のノウハウ本がベストセラーになったことがある。この本はそんなノウハウの本ではないが、ある意味、「幸せ」を感じる生き方

のノウハウ本と言っていいかもしれない。欲しい物を際限なく求め続けることが本当の幸福ではないと思いつながら、手に入れた時の束の間の満足感で同じ事を繰り返している自分がある。先ずは「欲しいモノ」と「必要なモノ」との見極めだ。ミニマリスト、わるくない、いや、なかなかいい。